

【書評】

宇都宮明子著『現代ドイツ中等歴史学習論改革に関する研究
—現実的変革の論理—』

(風間書房, 2013年) 8,000円

服部 一 秀
(山梨大学)

本書は、宇都宮明子氏(佐賀大学)が2011年に
広島大学大学院教育学研究科へ提出した学位論文
を補訂し、日本学術振興会2012年度科学研究費補
助金(研究成果公開促進費)の交付を受けて公刊
したものである。

本書の目的は、「現代ドイツ中等歴史学習論を
類型化し、各類型の代表例となる1990年代から
2000年代にかけての指導要領と中等社会系教科書
を分析して歴史学習の変革過程を考察することで、
現代ドイツ中等歴史学習の現実的変革の論理と構
造を解明すること」とされる。「実践レベルの歴
史学習の変革を可能にする要件を理論と実践両レ
ベルを通して明らかにし、着実に歴史学習の変革
の方策と方途を探るべきである」と考え、そのた
めに近年のドイツにおける実証主義歴史学習から
構成主義歴史学習への漸次的な変革の論理を解明
しようとねらっている。「実践レベルの歴史学習
をどうすれば変革できるのか」が主題である。

本書の全体は次の部・章から構成されている。

序 章	本研究の目的と方法
第1章	ドイツ中等歴史学習の展開と歴史学習 論の類型化
第1部	歴史研究のための歴史学習
第2章	実証主義歴史研究のための歴史学習
第3章	構成主義歴史研究のための歴史学習
第4章	歴史研究のための歴史学習の変革
第2部	社会研究のための歴史学習
第5章	実証主義社会研究のための歴史学習
第6章	構成主義社会研究のための歴史学習
第7章	社会研究のための歴史学習の変革
第3部	ドイツ歴史学習の現実的変革
第8章	ドイツ歴史学習の変革の論理と構造
終 章	研究の総括と考察

第1章では、ドイツの歴史学習論を、「実証
主義歴史研究のための歴史学習」(「歴史的事象研
究としての歴史学習論」, 「歴史理論研究としての
歴史学習論」)と「構成主義歴史研究のための歴
史学習」(「歴史解釈形成研究としての歴史学習
論」), 及び、「実証主義社会研究のための歴史学
習」(「過去社会諸事象研究としての歴史学習論」,
「過去社会理論研究としての歴史学習論」)と「構
成主義社会研究のための歴史学習」(「過去社会問
題研究としての歴史学習論」, 「過去社会形成研究
としての歴史学習論」)に類型化している。第1
部においては「歴史研究のための歴史学習」につ
いて扱い、第2・3章では、「実証主義歴史研究
のための歴史学習」と「構成主義歴史研究のため
の歴史学習」における3つの歴史学習論を事例と
なる指導要領・教科書に即して分析し、第4章で
は、指導要領の歴史学習論から教科書の歴史学習
への変革と歴史学習の変革という2つのレベルで、
歴史研究のための歴史学習における変革の論理を
考察している。第2部においては「社会研究のため
の歴史学習」について扱い、第5・6章では、
「実証主義社会研究のための歴史学習」と「構成
主義社会研究のための歴史学習」における4つの
歴史学習論を事例となる指導要領・教科書に即し
て分析し、第7章では、指導要領の歴史学習論か
ら教科書の歴史学習への変革と歴史学習の変革と
いう2つのレベルで、社会研究のための歴史学習
における変革の論理を考察している。第3部の第
8章では、第1・2部の考察を踏まえ、ドイツに
おける歴史学習の変革の論理をまとめ、変革を可
能にした要件を理論レベルと実践レベルの両レベ
ルで検討している。そうして終章では、(1)ドイツ
における歴史学習の変革では、「①学校教育現場
における実現を図るために、教科書は指導要領の

歴史学習論を学校教育現場で実際に実施可能な歴史学習へ変革させること、②教科書内の構成と配置を通して歴史学習を変革させること、これら2つの変革を通して、③歴史学習観そのものを変革させることにより、構成主義歴史学習が漸次的に実現化された、(2)「歴史教授学における歴史学習観の変革とその変革に応じた教科書の本文、史資料、学習課題の変更という理論と実践両レベルの相互作用」がドイツの歴史学習における学習内容と学習方法の変革を可能にした要件であると結論づけ、研究を総括している。

本書の大きな特色は、指導要領の歴史学習論を教科書の歴史学習へ具体化する「教科書内の変革」、次段階の歴史学習を可能にする教科書へ移行し既存の教科書における歴史学習の課題を克服する「教科書間の変革」という2つのレベルで変革を明らかにしようとしていることである。それらの一環において、同一題材の単元に即して各対象の単元構成を問う手法も、それが古代ローマ史単元であるために各対象本来の歴史学習がねらわれる高学年ではなく低学年の単元を取りあげることにつながっているのではという懸念もないではないものの、歴史学習の対比や移行の追究に向けた一つの手法として評価されるべきものである。

尤も、「教科書内の変革」については実際のところ、十分に論証できているとはいえない。最大の理由は、前提となる分析対象の選定にある。例えば、第1部の第3章では、構成主義歴史研究のための歴史学習について分析するため、学会版歴史科教育スタンダードを取りあげ、それに準拠した教科書として新版『アンノ』を取りあげている。しかし、この新版『アンノ』は実際にはベルリン市用であり、ベルリン市独自の指導要領に準拠して作成されている。第2章にて取りあげている全州共通の旧版『アンノ』と単純に比較できるものでもない。また、第2部の第6章では、構成主義社会研究のための歴史学習について分析するため、ヘッセン州ゲゼルシャフトツレーレの2009年版指導要領を取りあげ、それに準拠した教科書として新版『人間・時間・空間』を取りあげている。この2009年版指導要領は特別支援学校の学校種の指導要領である。新版『人間・時間・空間』は総合制

学校用と思われるが、ヘッセン州の総合制学校では第5章にて取りあげているゲゼルシャフトツレーレの1995年版指導要領が依然有効である。第1部と第2部の両方において、また、構成主義歴史学習に関しても、前提となる分析対象の選定が的を射ていないため、「教科書内の変革」の論証は難しい。

対象選定の他にも、第2章でニーダーザクセン州歴史科の指導要領を取りあげ、教科目標を引用し、それを導きにして解釈をすすめているが、その引用訳は適切か、訳を改めた場合にその後の解釈が十分維持されうるか、また、第3章で学会版教育スタンダードを取りあげ、小単元の学習構造まで考察しているが、この教育スタンダードがアウトカム志向に基づき、各学年段階末の到達目標を提示するものとして作られているのであれば、いかにして小単元の学習構造を確定できるのか等の疑問ももたれる。図表3-3など、ドイツ語資料を「そのまま訳出」としながら、実際は必ずしもそうっていない箇所もある。

とはいえ、それでも本書は社会科教育学研究上意義あるものである。「教科書内の変革」への着目は独創的であり、その究明に取り組もうとしたことの意味は小さくない。社会科教育学研究の発展に向け、重要な提起を行ったといえるだろう。また、「教科書間の変革」の解明では注目すべき成果をあげている。確かに、構成主義歴史学習の教科書における単元の構成や小単元の学習構造については、それらがドイツにおける現時点での到達点を表すものであるとすれば、構成主義とする筆者の解釈を納得させられるようにより具体的に詳しく説明する必要があった。けれども、歴史教科書における「学習内容と学習方法の多様化と有機的関連づけ、学習内容の相対化という条件を満たし、伝統的な歴史学習を脱却するという現実的変革」の基本構図を提示したことは功績といえる。日本での歴史学習改革の遂行にとっても示唆深い。ドイツにおける実証主義歴史学習から構成主義歴史学習への変革を教科書間というレベルで明らかにすることにより、本書はドイツ歴史教育の研究としても歴史学習の改革研究としても有意義な成果をあげている。